

ほえろ！ フイオン先生

仙台育英学園創立者

加藤利吉先生物語

著者略歴

奥 中 惇 夫(おくなか あつお)

1930年奈良県奈良市生れ。1953年東大文学部美学美術史学科卒業。新東宝、東映の助監督を経て、1964年東映テレビプロで監督昇進。1967年にフリーとなり、1972年日本映画監督協会の理事に就任。この間テレビの人気番組「鉄道公安36号」「特別機動捜査隊」「柔道一直線」「伝七捕物帳」「仮面ライダー」「燃えろ! アタック」「がんばれ! ロボコン」「がんばれ! レッドピッキーズ」などの監督を務め、脚本も手掛けた。このほかテレビドキュメンタリー、NHKビデオ教材や「日展」「院展」のビデオなど作品多数。埼玉県新座市栄5-3-33住

ほえろ! ライオン先生

仙台育英学園創設者 加藤利吉先生物語

発行／平成8年3月22日

著者／奥中惇夫

編集／河北新報社事業局出版部

発行／仙台育英学園教育振興会

〒983 仙台市宮城野区宮城野2丁目4番1号

電話022(256)4141

印刷／凸版印刷



加藤利吉先生

序にかえて

「利吉先生の魂を会津にかえしてやりたい」。

現在、会津若松の飯盛山に建つ学園創立者・加藤利吉先生の顕彰碑建立を思い立ったのは、私たち学園関係者のこのような思いからでした。

生前、加藤利吉先生は生まれ故郷である会津若松をこよなく愛し続けられました。会津の子供たちを育英塾で育てようと思われたり、鶴ヶ城再建時に多額の寄付をされたのも、会津を思う気持ちの現われによるものでした。

ですが、会津の地には先生を思い起こすものがないありませんでした。そこで顕彰碑建立の構想が生まれ、地元の方々のご協力や温かいご支援を得て、先生の生誕百十年にあたる平成四年に除幕式を行うに至った次第です。以来、仙台育英の建学の精神や学園の歴史を学ぶ目的で実施される「那須研修」に向かう途中、会津の地に立ち寄って顕彰碑に参拝することが続けられています。

私学仙台育英の歴史は、加藤利吉先生が開いた「育英塾」によって始まります。そして学園の理念・理想は、先生が唱えられた「建学の精神」によって継承されています。建学の精神は、本学園に入学した生徒たちにとっては学園生活を送っていくうえで不可欠な生活の指針であり、生活・行動の規範です。入学時や那須研修などで、折に触れこの精神について語る機会を持つてきましたが、その精神が書かれたテキストは残念ながら完璧なものではなく、物足りなさをつねづね感じてきました。

映画監督の奥中惇夫先生との出会いがあったのは、そんなときでした。奥中先生は、私たちの「利吉先生の魂を会津にかえしてやりたい」という気持ちに深く共感され、利吉先生の生涯をテーマにしたビデオ・ドラマの制作を快諾。明治、大正、昭和の激動の時代にあっても強靱な意志と努力で生き抜いた教育者・加藤利吉の一生を描くドラマ『北の国（ふるさと）へ』の制作が開始されることになりました。ドラマの制作は今年十一月の完成を目標に、すでに一月下旬から始められています。そしてもうひとつ、奥中先生との出会いにより思いがけない収穫を得ることができ、それがこの本の誕生に大きな力となりました。

私自身、かつて慶應義塾大学入学時に渡された『福翁自伝』のことは忘れられません。この一冊は自身の人生の書として、いまだに本箱から取り出しては読み返しているものです。このような一冊が本学園にもあったならというのは、かねてからの私の願いでした。

この夢を日本映画監督協会会員であり、日本放送作家協会会員でもある奥中先生が実現してくださいました。

加藤利吉先生物語『ほえろ！ライオン先生』は、これから本学園の建学の精神を学ぶ生徒のための副読本としてだけでなく、本学園の関係者および同窓生すべての精神の拠りどころの書となっていくことと確信いたします。

執筆にあたってくださいった奥中先生に深く感謝の意を表するとともに、その著作権を本学園に寄贈される先生の心の広さにあらためて敬意を表します。ビデオドラマの制作が、完成に向けて順調に進められていくようお祈りいたします。

最後にこの紙面を借りて、顕彰碑建立にご尽力くださり、すでに故人となられた大山恒二先生および斉藤東四郎先生に敬意と哀悼の意を表します。また、仙台育英学園高等学校の校長として学園の発展に力を注いで来られた加藤昭先生にも、関係者ともども学園の第一の功労者として感謝いたします。

一九九六年（平成八年）三月

育英人 加藤 雄彦

ほえろ！ライオン先生

仙台育英学園創立者

加藤利吉先生物語

第一章 戦の風

戦国時代の会津の状況 / 蒲生氏郷の死とその後 / 天下分け
目の関ヶ原の戦い / 蒲生氏から松平氏へ / 安政の大獄 /
桜田門外の変 / 坂下門外の変 / 松平容保京都守護職に / 蛤
御門の変 / 長州征伐 / 第二次長州征伐 / 孝明天皇崩御
/ 大政奉還 / 戊辰戦争始まる / 江戸城明け渡し / 奥
羽の情勢 / 会津戦争 / 会津鶴ヶ城籠城一カ月 / 落城の
後 / 戊辰戦争終結 / 白河以北一山百文 / 福島の大獄 /
利喜次郎の災難

第二章 炭百俵

誕生 / 磐梯山爆発 / 官軍はいやだ！ / 会津身知らず
/ 本の好きな子 / 十六歳 / 悩み / 東京へ行く /
将来を思つて / 炭百俵 / 出発のとき

第三章 明日への挑戦

59

東京留学 / 母の手紙 / ヘンリー / 横浜 / トラフル
別れ / 召集令状

第四章 死と生

77

日露戦争 / 理不尽 / 命令 / 死地へ / 仙台衛戍病院
さよの看病 / 夢

第五章 希望の大地

101

結婚式 / 育英塾 / 授業 / ライオン先生 / 父の死
家族愛 / 米の仕入れ / 利吉の一面 / 海の幸
外国への夢 / 天才少年 / 汚名を晴らす

第六章 飛翔

127

仙台育英学校設立 / こま逝去 / 仙台育英中学校の開校
建学の三大精神 / 栄吉の結婚 / 加藤昭誕生 / 仙台育英
中学校の進展

第七章 炎

日中戦争 / 校長退任・理事長職に専念 / 太平洋戦争勃発
/ 別れ / 僕も軍人に / 仙台大空襲 / 焼け跡

141

第八章 北の不死鳥

授業再開 / 終戦 / 青空教室 / 戦争裁判 / 慟哭 /
廃校? / 宮城野に新校地 / 利吉流お仕置き / 学制改革

153

第九章 会津身知らずの秋

京都 / 昭の結婚 / 昭校長 / 曾孫 / 会津へ / 巨
星墜つ

171

第十章 一番星

その後

183

この本を書くに当たって

188

第一章

戦いくさの風

明治十五年（一八八二年）十二月三日、加藤利吉は父加藤利喜次郎りきじろう、母こまの次男として会津若松市あいづわかまつし（当時は若松市）に生まれました。

普通なら伝記はこういう書き出しで始まって年を追って進んでいくのですが、加藤利吉の場合は、その前の戊辰戦争ぼしん、さらに戦国時代の関ヶ原せきがはらの戦いにまでさかのぼらなければなりません。何故なぜそうなのか、読んでいくうちにだんだんわかってきます。歴史の勉強みたいでいやだな、と思わないで、どうか読み進んで下さい。

戦国時代せんごくじだいの会津の状況

今からおおよそ四百年〜五百年の昔、十五世紀後半から十六世紀後半の戦国時代は、日本に内乱の続いた時代です。戦国時代という名前は後からつけられたものですが、その名の通り日本国内のあちこちで戦争があり、勝ったものが領土を取るといって弱肉強食（弱いものを強いものがやっつける）の世界でした。有力な武将は、国内の乱れに乗じて自分の勢力を伸ばし、あわよくば全国統一をし、その頂点に立とうと、戦っていました。

戦争はいやなものです。敗れた者や戦いで死んだ者の遺族や戦いの被害者には深い恨みうろを、そして勝った者にも奢りおごと優越感や弱者への差別感を、何十年の後までも残します。現に戦後五十年たつたいまもなお、太平洋戦争の侵略者と被侵略者、戦争の被害者と加害者、勝者と敗者の怨念おんねん（恨みの思い）が渦巻いているのが現状です。

ところで戦国時代ですが、東北地方の覇者はしや、そしてゆくゆくは日本全国の覇者となろうとしていた有力な武将に伊達政宗だてまさむねがいます。政宗は近くの土地を侵略し、芦名氏あしなの領土だった会津を攻めて自分の領地にしてしまいました。

そのころ全国制覇をめざした豊臣秀吉とよとみひでよしは、関東に進出し、北条氏ほうちょうの小田原城を攻め

ました。そして伊達政宗に早く小田原へ来て小田原城攻略に協力するように要求しましたが、政宗には「おれは豊臣秀吉の家来ではない」というプライドがありました。そしてどちらが優勢か状況を見極めようとなかなか出陣しなかったため、やっと重い腰を上げて出かけたときには、勝敗はほとんど決着がついてしまっていました。

「この役立たずが！」と怒鳴ったかどうかはわかりませんが、怒った豊臣秀吉は、戦後会津をはじめ伊達政宗の領土の幾つかを取り上げてしまいました。しかし会津の次の領主を誰にするかが大きな問題でした。弱い武将ではいつまた政宗に取り返されるか不安です。そこで蒲生氏郷という知恵と勇気のある腹心（心の底から深く信頼出



蒲生氏郷

来る人）の武將に会津を与えて、伊達政宗と東北地方に睨みをきかせることにしたのです。蒲生氏郷は秀吉の命令に従って、松坂城（三重県）から会津へ移って来ました。そして会津の黒川を若松と名前を変え、新しく城を築き、城下町を建設したのです。そのとき蒲生氏郷に従って会津に移って来た家臣の一人が加藤利吉の先祖だと伝えら

れています。

蒲生氏郷は武力を誇るだけの殿様ではありません。米などの農業をはじめ産業の奨励にも力を注ぎました。お椀や漆器の生産にも力を入れ、会津塗や会津張子、数々の地酒など会津の名産品は氏郷の産業奨励策の成果として今に残っているのです。

参考までに言いますと、その後政宗は、何とか会津を取り返そうと策略（はかりごと）をめぐらすこと）しましたが、氏郷の用心深い作戦とすばやい行動、そして援軍によって、政宗の野望は見事に打ち破られたのです。

蒲生氏郷の死とその後

全国制覇をした豊臣秀吉は無謀（考えの足りないこと）にも朝鮮に侵略戦争をしかけました。蒲生氏郷は朝鮮進攻軍の後備えとして名護屋（佐賀県内）に出陣しましたが、秀吉の大坂帰陣に従って帰った後、京都で病気になり、文禄四年（一五九五年）二月、ついに死んでしまいました。

会津九十二万石は十三歳の長男秀行が継ぎましたが、氏郷ほどの力がなく、藩内でごたごたが起ったため、秀吉に統制力の無さを強く責められて会津九十二万石を取り上げられ、宇都宮（栃木県）十八万石に移されてしまいました。このとき加藤利吉

の先祖は、移転を嫌^{きら}って武士をやめ、会津に残ったと考えられています。

そして会津の新領主は上杉景勝^{うえすぎかげかつ}になったのです。

天下分け目の関ヶ原の戦い

豊臣秀吉が死んで、その子秀頼^{ひでより}の時代になると、徳川家康^{とくがわいえやす}が力をつけてきて、豊臣家の将来に危機感を持った豊臣方の武将たちの西軍と、新しい徳川の時代に将来をかせようとする武将たちの東軍が、慶長五年（一六〇〇年）、関ヶ原（岐阜県内）で戦うことになります。これは両軍にとってまさに天下分け目の戦いで、およそ七万五千名の東軍と十万名の西軍が激しい戦いのすえ、東軍の圧倒的な勝利に終わりました。

そのころ蒲生秀行は徳川家康の娘と結婚していましたから、当然東軍についたのですが、東北地方の押さえとして宇都宮に残って、いわば東軍の留守番役を命じられていたために、直接戦いには参加していません。

東軍勝利の結果、西軍に加わった武将たちは、当然厳しい処分を受けます。

西軍の大将・毛利輝元^{もうりてるもと}は八カ国を削られ、周防・長門^{ながと}（山口県）の二カ国だけになり、禄高も百二十五万五千石から三十六万九千石に大きく減らされてしまったのです。

薩摩^{さつま}

（鹿児島県）の島津義弘も混戦の中からやつとの思いで逃げ帰ったわけで、所^{しよ}領^{りやう}（領地）は取り上げられなかったものの、その後、河川工事や、江戸城、寛永寺^{かんえいじ}の改築などの大工事を命ぜられ、莫大^{ばくだい}な金額の出費を押し付けられたのです。

この徳川幕府に対する薩摩と長州^{ちやうしゅう}（長門）の大きな恨み^{うらみ}が、二百数十年後まで続き、幕末の倒幕運動、さらに戊辰戦争へ発展したのだとも言われています。

そして蒲生秀行は家康の娘と結婚していたお陰で、会津に戻り、六十万石を受け取ることになりました。

蒲生氏から松平氏へ

蒲生氏郷の後の殿様は体が弱く、次々と若いうちに死んでしまいました。蒲生秀行は慶長十七年（一六二二年）、三十歳で死に、その子忠郷は二十五歳で亡くなり、跡を継いだ弟忠知^{ただち}は、伊予松山^{いよまつやま}（愛媛県）二十万石に移されました。忠知が松山で三十歳で亡くなったときには跡継ぎの子供がいませ

保科正之



んでした。それで寛永十一年（一六三四年）、蒲生家は断絶、所領は幕府に没収されてしまいました。

蒲生家はともかく、会津はどうなったかといいますと、会津は加藤嘉明、明成親子の十数年の短い治世（政治を行うこと）の後、二代將軍秀忠の庶子（妾の子）である保科正之が会津藩の藩主となりました。その子三代目正容の代から將軍家ゆかりの松平姓を名乗るようになったのです。どうして保科正之が松平姓を名乗らなかったかというと、將軍秀忠が恐妻家で、保科正之が自分の子供だということを隠していて、正式に認めなかったからです。秀忠が死んで、三代將軍家光の時代になって初めて、家光が保科正之を正式に弟と認め、会津二十六万石を与えたのです。

そして九代目の会津藩主が、松平容保です。

安政の大獄

三百年近くもの間、鎖国（外国との交通・通商を禁止すること）政策で平穩無事に過ごしてきた江戸時代も、幕末になると黒船の来航を機に、世の中は騒然とした状態になります。尊皇攘夷（天皇の權威の絶対化と封建的排外主義とを結合した政治思想）だ、開国だ、公武合体（朝廷と幕府の協力一致を図って国難を処理しようとする



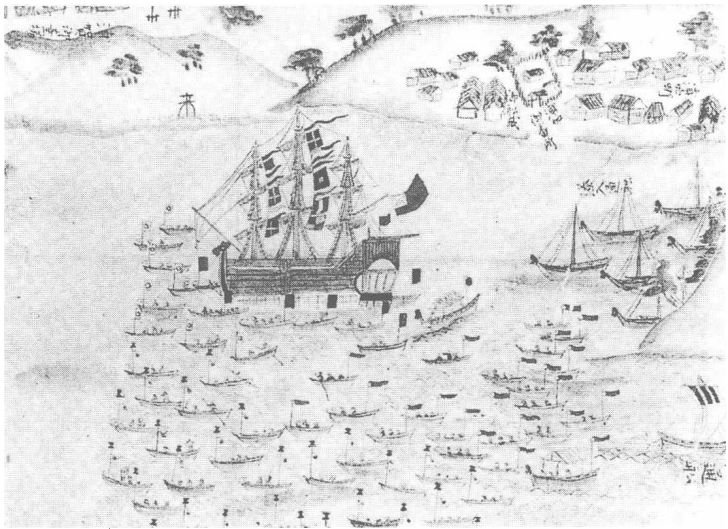
井伊直弼

主張）だと声高に論じ合い、争い、あ
 げくは反対派を斬り殺すなど、血腥
 い事件が次々と起こります。そして公
 武合体の政策にそつて、皇女和宮が将
 軍家茂に降嫁しました。

騒然とした中で安政五年（一八五八

年）、彦根（岐阜県）藩主井伊直弼が大老（幕府の一番上の役）になり、アメリカの黒
 船の威力に屈して、反対の攘夷派を押さえて日米通商条約を結びました。幕府が天皇

黒船来航の図



の許可をとらずに独断で開国つまり日米通商条約を締結したことに尊王攘夷派は猛反発しましたが、直弼は尊王攘夷派の志士たちを多数逮捕、そして死刑などの厳罰に処してしまいます。この弾圧を『安政の大獄』と言います。

桜田門外の変／坂下門外の変

この井伊直弼の弾圧に対して当然反発が出てきます。

それは万延元年（一八六〇年）三月三日のことです。春には珍しい大雪が、江戸の町を白一色にしていました。江戸城の門の一つ桜田門も、雪に閉ざされていました。降りしきる雪の中で、息をひそめて隠れている一団がいました。

尊皇攘夷派の志士たちです。

目指すは井伊大老ただ一人。

何も知らずに、井伊大老の登城の列が桜田門に近付いて来ました。志士たちは、一気に井伊直弼の駕籠かごをめがけて飛びかかり、護衛の武士たちを蹴散けちらして、井伊大老を斬り殺してしまったのです。

これが有名な『桜田門外の変』です。

大老が簡単に殺されたのですから、この事件で幕府の権威は大きく傷つき、倒幕とうぼく（幕